

### 日本の将来推計人口のモデルの紹介

現代の日本が抱える最も大きな問題の一つとして、少子高齢化が挙げられる。2019年度の調査で、日本の老年人口（65歳以上の人口）は過去最高の3588万人、出生数は過去最低の86万4千人を記録したと政府は発表している。国や地方公共団体は行政の介入によって、世界に前例のないこの現状に対応していく必要がある。政府がこのような政治・行政を公正で効率的に行うために、国勢調査による人口の状況の把握が不可欠である。しかし、国勢調査は5年に1度しかなく、調査されていない間の人口の状況は推計する必要がある。

その役割を担っているのが、国立社会保障・人口問題研究所である。同研究所は、人口学的手法の国際的な標準であるコーホート要因法に基づき、人口変動要因である出生、死亡、国際人口移動について、それぞれの要因に関する統計指標の実績に基づき、その動向を数理モデルにより将来に投影する形で男女年齢別に仮定を設け、将来の男女別年齢別人口を推計している。

同研究所は、2019年の老年人口が3573万人になり、出生数が90万人になるということをも2015年のデータから推計しており、かなり高い精度で人口動態を予測できていることが窺える。

抄読会では、同研究所がどのような仮定を設定し、どのようなモデルを用いて人口を推計しているのか紹介する。

#### 参考文献

厚生労働省「令和元年（2019）人口動態統計（確定数）の概況」

総務省統計局「高齢者の人口」

日本の将来推計人口（平成29年推計）報告書

日本の将来推計人口：平成29年推計の解説および条件付推計